

フランス語の評価表現の体系とメタファー表現の形式的制約

治山純子
(東京国際大学非常勤)

フランス語の評価表現の特徴を、感情・価値を共有するコミュニティにおける評価表現の体系を提示したアプレイザル理論(Martin & White 2005 等)の道具立てを用いて分析する。コーパスは、フランス語の様々なカテゴリーに属するブログとする。アプレイザル理論では、Attitude (態度評価) は、Affect (感情)・Judgement (規範・世評)・Appreciation (反応・構成・価値) という 3 つの評価基準に分類される。これらの評価基準と表現の直接性／間接性の対応関係について考察する。またこの対応関係の傾向が、評価極性 (ポジティブ・ネガティブ) により、どのように異なるのかを調査した結果、特に Judgement (規範・世評) では、評価極性がネガティブの場合は、ポジティブの場合より、Inscribe (直接評価) の割合が減り、Provoke (駆り立て) や Flag (示唆) など間接表現の割合が増える傾向があることが分かった。この理由を、コミュニケーション場面における Judgement という評価基準の特徴から考察する。

また、Provoke (駆り立て) に分類されるメタファーの幾つかの定型表現の分析を行う。Sale と Propre, Salement と Proprement のような評価極性が逆の対義語のペアは、字義用法では、入れ替えて意味が対照的になる容認可能な文を作れるが、メタファー用法では入れ替え可能な場合とそうでない場合がある。例えば、“Se conduire proprement” は、proprement を salement に入れ替えて容認可能な文を作れるが、“Avoir une sale gueule” の場合は、sale を propre に入れ替えて容認可能な文を作ることはいできない。このようなメタファーの形式的制約を、評価基準の特性と共に分析する。